

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13326

研究課題名（和文）近世大名の顕彰と旧藩士収集史料の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on honoring early-modern daimyo and historical materials collected by former feudal retainers

研究代表者

清水 翔太郎（Shimizu, Shotaro）

秋田大学・教育文化学部・講師

研究者番号：60815679

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、秋田藩9代藩主佐竹義和を事例として、近代における旧秋田藩士による大名顕彰事業の実態を分析するとともに、近世史料を用いて義和の実像を検討した。その結果、明治末年から大正期にかけて、佐竹義和の顕彰事業が進められ、義和を中興の「名君」とする認識が共有されることを明らかにした。また、佐竹義和の自筆記録の分析を通して、評伝を通して語られてきた家老との関係を相対化し、一門や側方が義和の意思形成に影響を及ぼしていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本近世史、近代史を架橋し、さらにアーカイブズ学の視点から大名のイメージ形成過程とそれに対する実像に迫った点で学術的意義がある。また、近世大名については、伝記などを通して郷土の偉人としてのイメージが形成され、それは現代社会においても根強く共有されているが、本研究は大名の自筆記録を用い、共有されている大名像の相対化を図った。すなわち、実証的な分析により、その成果の共有を図った点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the actual situation of daimyo honoring projects by the former Akita feudal retainers in modern times, using the case of Yoshimasa Satake, the ninth lord of the Akita domain, and examined the real image of Yoshimasa using early modern historical materials. As a result, from the end of the Meiji period to the Taisho period, a project to honor Yoshimasa Satake was promoted, and it was clarified that the recognition that Yoshimasa was a 'great ruler' of the revival was shared. In addition, through the analysis of Yoshimasa Satake's handwritten records, he relativized the relationship with the chief retainer, which was told through critical biographies, and clarified that the Satake clan and his close associates had an influence on Yoshimasa's decision-making.

研究分野：日本史

キーワード：近世大名 顕彰

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近代における近世大名の顕彰事業は、伝記などを通して大名のイメージを形成し、それは現代社会においても根強く残されている。本研究はこうした現代的背景もふまえて、近代における旧藩士による大名顕彰事業とそれに関わった旧藩士が収集した史料群に注目し、近世史、近代史を架橋し、さらにアーカイブズ学の視点から、大名のイメージ形成過程とそれに対する大名の実像に迫ることを企図して研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究は、秋田藩における寛政改革を主導し、「名君」とされてきた9代藩主佐竹義和を事例として、旧秋田藩士らによる義和関連史料の収集や顕彰事業の実態を検討し、実像とは離れた大名のイメージが形成されていく過程を明らかにするとともに、近世史料も駆使してその実像を解明することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、史料収蔵機関において史料調査・収集を行い、旧秋田藩士による史料収集及び歴史叙述と佐竹義和顕彰事業について基礎的な分析を進めた。また、義和「名君」像が形成されていく過程と人々に浸透していく過程を捉え、さらには義和の自筆記録を用いてその政治的役割を実証するといった手法を用いた。具体的な調査、分析方法は下記の通りである。

(1) 旧藩士収集史料群の分析

旧秋田藩士には明治期以降、秋田藩に関する史料の収集を行い、史料群を構築した人物について複数名確認出来る。こうした旧藩士収集史料群について、秋田県公文書館や大館市立図書館栗盛記念図書館で調査を行い、その構造を分析するなど基礎的作業を進めるとともに、藩主顕彰に関わる史料を収集、分析した。

(2) 旧藩士による藩主顕彰の分析

上記の旧藩士収集史料群の分析の他、大正5年(1916)に『天樹院佐竹義和公』を刊行し、秋田市長を務めた大久保鉄作や大正9年に『佐竹義和公頌徳集全』を刊行した天樹院公頌徳集編纂会に注目し、義和「名君」像を創造し、広めた旧藩士の活動の実態を分析した。また、調査の過程で顕彰事業と藩主への追贈が密接に関わっていることがわかったため、秋田県公文書館において旧藩士の贈位に関する公文書の調査を行った。

(3) 近世大名の自筆記録を用いた政治的役割の解明

上記の顕彰による歴史叙述に対して、「名君」とされた大名の実像を明らかにするため、大名自筆の政務記録を用いて、大名の政治的役割を分析した。本研究では、佐竹義和の「用向書留」(全17冊、秋田県公文書館所蔵、享和3年(1803)~文化12年(1815))を翻刻し、分析を進めた。

4. 研究成果

(1) 旧藩士収集史料群の構造と秋田藩主関連史料

明治期以降、秋田藩関係の史料を収集した旧藩士収集史料群、具体的には岡忠精の「岡文庫」、東山太郎の「東山文庫」、狩野徳蔵の「狩野文庫」(以上、秋田県公文書館所蔵)や真崎勇助の「真崎文庫」(大館市立図書館栗盛記念図書館所蔵)と「落穂文庫」(秋田県公文書館)の調査を行い、秋田藩主関連史料を収集、分析して以下の成果を得た。

これらの史料群は、先祖伝来史料も含まれるが、近代において収集された史料が多く含まれている点に特徴がある。真崎勇助の「真崎文庫」は、明治・大正期にかけて真崎が収集した近世史料()の他、旧藩士から借用し、その写本を編集した史料()が大量に含まれている。

義和に関わる史料に注目すれば、()については佐竹義和の事蹟を藩がまとめた「義和公御一代御政事略記」や領内巡見の様子を義和自身が紀行文としてまとめた「千町田の記」や「天樹院様御道の記」の写本等が含まれている。後者は19世紀前半に作成された写本であり、義和没後間もない時期から藩士間で義和の紀行文の写本が流布していたことがわかる。()については、真崎が編纂した『汲古録』等に「義和公御事蹟」といった義和や歴代藩主の事蹟に関する記録が収録されている。

義和関連史料の調査を進める中で、これらの史料群には、義和以外の藩主の顕彰に関する史料も多数含まれていることがわかった。そのため義和以外の藩主顕彰事業に関する史料調査・収集も行った。初代佐竹義宣と12代佐竹義堯の顕彰に関する史料や明治34年(1901)に行われた佐竹家秋田遷封三百年祭記念行事に関する史料を収集し、分析を行った。それにより義和の顕彰事業は、義宣、義堯の顕彰より遅れて、明治末年から大正期に進められていたことがわかった。

(2) 義和顕彰事業の分析

近世における義和像

義和期は藩校の創設や職制改革の点で画期であり、その治世の記録を後世の亀鑑とするために史料編纂が行われた。義和の没後、秋田藩によって編纂された『御亀鑑』や「義和公御一代御政事略記」といった義和に関する記録は、いずれも一次史料に基づき編纂されたものであり、特定の事蹟を顕彰する意図はみられない。一方で旧藩士収集史料群における佐竹義和関連史料に注目すると、義和が紀行文としてまとめた領内巡視の記録は複数含まれており、それに対する関心の高さが窺える。またそれらを収集、分析する中で、義和没後間もない時期に写本が作成され、領民を憐れみ、教化する義和 = 「仁君」像が家中で共有されていたことがわかった。

明治期における旧藩士による秋田藩主顕彰

旧藩士収集史料群の調査を進め、義和以外の藩主顕彰に関する史料を収集・分析する中で、明治末年に至るまで義和顕彰は特段盛り上がりを見せず、明治期には旧藩士によって戊辰戦争との関連で12代佐竹義堯の顕彰が進められ、その後初代義宣の顕彰が進められるという一連の流れがあることがわかった。

このような顕彰の動向は、藩主への贈位と密接に関わっているという見通しを立て、秋田県公文書館所蔵「秋田県庁文書(戦前)」に含まれる贈位関係書類の調査を行った。その結果、明治41年(1908)に義堯は正二位に追贈されたが、義宣については、明治34年(1901)に行われた佐竹家秋田遷封三百年祭記念行事に際して、顕彰が盛り上がりを見せるものの、明治41年に贈位申請をするも実現しなかったことがわかった。こうした点をふまえ、義宣の顕彰が難航する中で、明治末年以降、義和が中興の「名君」として顕彰の対象とされ、旧藩士による顕彰事業が進められた背景を明らかにした。

明治末年から大正期にかけての佐竹義和顕彰

明治末年から進められた佐竹義和顕彰の中心となったのは、旧秋田藩士大久保鉄作であった。大久保は明治39年(1906)から大正5年(1916)にかけて、秋田市長を務めていたが、その間に義和伝記の執筆と贈位申請が連動して進められていることを明らかにした。

大久保の『天樹院佐竹義和公』によれば、明治42年(1909)、伊藤博文の秋田来訪に際して、義和の略歴と山水画を献上したことで伊藤博文に義和が「名君」とであると認知され、さらに伊藤を介して明治天皇にも認知されるに至った。伊藤は、義和の事蹟が世に知られていないのは遺憾であり、大久保に詳細な伝記をまとめることを許可したが、そうした中で大正期に入ると大久保は新聞連載、伝記の刊行を通して、義和顕彰を進めた。大正3年(1914)7月の「天樹院公百年祭」に合わせて、大久保は「天樹院公逸事」と題して義和の事蹟に関する連載を秋田の新聞で開始し、これは10月まで55回にわたった。この連載は、秋田県内において義和「名君」像が共有される起点であったと言える。さらに大正5年に大久保は「天樹院公逸事」を修正、加筆した『天樹院佐竹義和公』を刊行し、ここに「名君」義和の伝記が初めて成った。

この間、大正4年(1915)には秋田県から内務省に対して、義和追贈の申請が行われたが、追贈は見送られた。その後大正7年に再度申請し、義和に従三位が追贈されたが、書類の作成には大久保が関与していたことが、秋田県公文書館において贈位関係書類を調査、分析する中でわかった。

このように義和の顕彰と贈位申請書類の作成は秋田市長大久保鉄作が中心となり、大正期に贈位が実現すると、旧藩士を中心とした天樹院公頌徳集編纂会によって、顕彰事業が広がりをみせたことがわかった。こうして大正期に義和は秋田藩中興の「名君」と位置づけられ、家老疋田斎(定常)ら「賢宰」とともに、藩校の設立と人材養成、殖産興業と専売制による財政建て直し等を行ったとする認識が共有されたことを明らかにした。

(3) 佐竹義和の自筆記録を用いた実像の分析

佐竹義和の政務記録「用向書留」(秋田県公文書館所蔵)は、近代における義和顕彰事業でも注目されることのなかった史料であり、そもそも義和の自筆記録であると比定されてこなかったため、これまで研究に用いられることはなかった。しかしながら、上記のような義和「名君」像に対する実像に迫る上で重要な史料であり、本研究ではその翻刻と分析を進め、以下の点を明らかにすることができた。

本研究では特に義和の政務の実態について、久保田城内における義和の政務空間に注目して、義和の意思形成に関与した家臣との関係を明らかにした。

義和の政務の中心となっていたのは、自らが最終意思決定権を有する家中の家格をめぐる問題の処理であり、これまでの研究で言及されることはなかった、家中の重臣層と中・下級藩士間の家格争論である「廻座・諸士同席一件」に注目して、義和と一門、家老、側方役人による意思決定過程を明らかにした。

義和は官僚制外にあった一門(苗字衆)東家当主を重用したが、江戸で部屋住としてあった縁者に東家を相続させるなど、自らの権力基盤として重視していたことがわかった。これまでの研究では、義和の改革政治を推進する家老及び中・下級家臣と重臣層の対立が指摘されてきたが、義和の政務を東家当主や側方役人が支えていた側面や、義和と家老・重臣層との緊張関係など、単純な対立構造では説明できない義和と家臣の関係の実態を指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 清水翔太郎	4. 巻 66
2. 論文標題 19世紀初頭の秋田佐竹家における大名・家臣関係 「廻座・諸士同席一件」を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 秋大史学	6. 最初と最後の頁 24-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 清水 翔太郎
2. 発表標題 近世大名居城の空間構造に関する試論 久保田城を事例に
3. 学会等名 2022年度秋田大学史学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 清水 翔太郎
2. 発表標題 近代における秋田藩主佐竹義和の顕彰と旧藩士
3. 学会等名 秋田近代史研究会秋季研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 清水 翔太郎
2. 発表標題 秋田藩佐竹家における一門の政治的位置と役割
3. 学会等名 歴史学研究会日本近世史部会2022年度大会支援報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 清水翔太郎
2. 発表標題 近世後期の大名家における部屋住の処遇
3. 学会等名 東北史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 東北大学日本史研究室	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 東北史講義【近世・近現代篇】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------